

## B. Malinowski の文化論とスポーツ

岡 田 猛

### B. Malinowski's Theory of Culture and Sports

Takeshi OKADA

#### 目 次

- I 緒 言
- II 機能主義
  - 1) 機能の概念レベル
  - 2) Malinowski の機能概念
- III 文化論
  - 1) 文化の定義
  - 2) 生命活動系列
  - 3) 生命活動系列の文化的再定義
    - 基本的要求と文化的反応 —
  - 4) 道具的至上命令
  - 5) 「制度」カテゴリーについて
- IV スポーツ文化論

#### I

体育社会学の研究領域として、体育・スポーツの文化社会学的研究があげられている。例えば、我が国で初めて体育社会学の構想を提示した竹之下は、「集団社会学的角度からの問題」、「社会変動と体育」、「社会問題と体育」に加えて、「文化社会学的角度からの問題」をその研究領域としてあげている。<sup>1)</sup> 爾来、なんらかの形で体育社会学を体系的に論述した著書においては、この分野への関心は継承されてきている。<sup>2)</sup> また、J. Huizinga, R. Caillois のプレイ論にもとづくスポーツ論の展開も活発になされてきているが、<sup>3)</sup> これもこの研究領域に含めて考えてよいであろう。

それらを内容について概観してみるならば、学校体育の学習指導論にかかわる、内容・教材の特性論的アプローチ、社会生活におけるスポーツの存在態様と機能にかかれる生活機能的レベル、等々、多様な展開を示してきたといえるであろう。

しかしながら、その際、スポーツは果して文化であるといえるのか、もしいえるとすればどのような論拠でもっていえるのか、そしてそれは他の文化とどのような関係にあり、それ自体どのような文化的構造を有しているのか、についての論証は等閑に付されてきた。一・二の例外を除いて

は、<sup>4)</sup> R. Linton<sup>5)</sup> などの代表的学者の抽象的・代表的文化概念が形式的に引用されるだけで、文化理論を総体的に把握し、そこからスポーツの文化的特性へと内的に調理を展開するという作業は素通りされてきた。このような作業は、体育・スポーツと文化の問題を論じようとする時には、いわば出発点をなすものであるが、それが以上の如き状況にあることは、どのような理由によるのであろうか。

佐伯は、体育が文化として認識されてこなかった理由を、体育に関する文化的な研究の出発が遅かったことに加えて、身心二元論にもとづく戦前の体育と文化に対する考え方の影響の大きさに求めている。<sup>6)</sup> もともと、日本にあってはドイツの影響が強く、文化概念も、「生の哲学」にもとづく精神的過程、所産としての価値観念の意味づけがそのまま持ち込まれたことによって、必ずしも日本人の価値観からして正当に評価されていたとはいえないスポーツが文化であるなどという考えが受け入れられにくかったという外的な事情が考えられるだろう。しかし体育社会学での内部的事情もみのがすわけにはいかない。それは、学問内部での正しい意味での、研究者の研究内容についての分化、専門化がなされてこなかったということである。このことについては、かつて影山も体育社会学研究20年を回顧して、「よく考えてみると、皆が同じような研究をしているような気がしてならない」<sup>7)</sup>と述べているところである。事実、体育社会学研究会より1972年以来年刊で出されている機関誌において、多くの異なった特集テーマ論文に同著者名がみられるが、このよう事は他の学問ではあまりみられないことである。もち論、研究のあり方として、極度の分化に対して総合化の必要が叫ばれているように、あしき専門主義におちいつてはならないが、しかし、体育雑誌によくみられる巻頭論文著者の常連化といった傾向は是正されていく必要があるであろう。

「体育・スポーツの文化社会学的研究」で、その文化性を論理的に証明することは、いわば出発点であるといえるのに、それが等閑に付されてきたことについては、以上のような事情が考えられる。遅きに失した感もあるが、「体育・スポーツの文化社会学的研究」の出発点といえるこの基礎的作業を開始しようと思う。今回は、機能主義的文化理論の代表と目される B. Malinowski<sup>8)</sup> をとりあげ、彼の理論の最後の集大成といえる著書「A Scientific Theory of Culture and Other Essays」<sup>9)</sup> によって、スポーツの文化論的理解をすすめていくことにする。

#### 注

- 1) 竹之下休蔵：社会学的研究法，日本体育学会編 体育学研究法，杏林書院 pp. 297～349 昭和32年
- 2) 現代保健体育学大系3 体育社会学（大修館書店，1972），体育社会学入門（大修館書店，1975）においても、「体育の文化」；「体育と文化」として一章をさいている。
- 3) 例えば次の研究がある。  
大橋美勝：文化としてのプレイの概念について 東京教育大修士論文 昭和45年  
竹之下休蔵：プレイ・スポーツ・体育論 大修館書店 1972  
永島惇正：プレイ論による体育科学習指導論の試み，体育社会学研究 道と書院 pp. 283～301 1974
- 4) 例えば，高部岩雄の「運動文化論序説」—浅井浅一編 体育学論叢 (1) 日本辞書株式会社 昭和45年 所収—は，それまでの文化概念から「文化の条件」として，「人間の知的，精神的作用の所産である」；「社

会的なものである」の2点を抽出し、それぞれについてスポーツの文化的資格を検定し、検証した。また筆者は、東京教育大修士論文（昭和48年）「文化の一構成要素としてのスポーツの社会学的考察」において、学習、シンボル、社会的存在、機能、統合性の観点からスポーツの文化性を検討した。

その他、スポーツの文化性を論じたものに外国では次のものがある。

A. S. Daniels : "Sport and Human Relations" in E. Jokl & E. Simon (eds) *International Research in Sport and Physical Education* Thomas pp. 23-30, 1964.

A. S. Daniels : "The Study of Sport as an Element of the Culture" in *International Review of Sport Sociology* vol. 1 pp. 153-165, 1966.

F. S. Frederickson : "Sports and the Cultures of Man" in John W. Loy & G. S. Kenyon (eds) *Sport, Culture and Society* Macmillan pp. 87-100, 1969.

René Maheu : "Sport and Culture" in G. H. Sage (ed) *Sport and American Society* Addison-Wesley Publishing Company pp. 386-397, 1970.

5) R. Linton : *The Cultural Background of Personality* Prentice-Hall, 1945.

6) 佐伯聡夫 : 体育と文化 前注2) 体育社会学入門 pp. 26-27

7) 影山健 : 体育社会学研究の20年 体育の科学 vol. 19. 杏林書院 p. 721. 1969.

8) Bronislaw Kasper Malinowski, 1884-1942. ポーランド生まれの文化人類学者。初め物理学と数学を学んだが、Frazerの「金枝篇」を読み、ライプチヒ大学で W. Wundt の影響を強く受けて文化人類学に転向した。その後、第二の郷国となったイギリスに渡り、旺盛な研究活動を展開した。研究内容は、トロブリアド島民を中心とした画期的な民族誌的現地調査、それにもとづく理論的研究におよぶ。

9) *A Scientific Theory of Culture and Other Essays* : The University of North Carolina Press, 1944.

出版年からもわかるように、本書は Malinowski の遺稿である。彼の多彩な実地調査に比して必ずしも評価の低い理論研究分野での、最後の大成果が本書であるといえる。Malinowski 夫人により編集を依頼された H. Cairns の言によると、本書には「人類学史上最も優秀有力な一人の学者のきわめて重要な問題領域に関する熟成した見解が提示されている」。姫岡勤、上子武次訳「マリノフスキー文化の科学的理論」岩波書店 p. iii 昭和33年。なお、以下の引用訳文は筆者によるものであるが、その際、同上訳書をおおいに参考にさせていただいた。ここに記して感謝の意を表しておきたい。

## II

Malinowski 自身、自認しているように、彼は「機能主義的」文化論者である。したがって彼の文化理論の解明において「機能 (function)」ないし「機能主義 (functionalism)」についての理解は不可欠であるといわなければならない。本章では機能についての一般的概念を概観し、彼の機能概念を析出することによって、文化理論解明への橋わたしとしたい。

1) 一般に機能とは、「はたらき、作用」と考えられている。コトバの機能は意志の伝達である、というのがごときである。しかしその使われ方は おおよそ 三つのレベルに分類することができる。第一は、一つの単位の活動を指すにとどまる場合である。例えば、ある地位 (status) の占有者としての役割 (role) のごときである。しかし、この機能概念はあまりに広すぎるために、分析道具として意識的に用いられる場合にはこの使用法は避けられてきた。第二のレベルは、例えば、

生活水準の上昇と出産率の低下との関係のごとく、変数間の共変 (co-variation) 関係を指す場合である。最後に第三のレベルは、生物学において、有機体の各器官がその有機体の維持に寄与している過程を機能とよんでいるごとく、一つの要因・単位の活動がそれを含む高次の単位にとってどのような意味をもつかという見地から使用される場合である。この場合、機能が向けられる単位として選ばれてきたのは、従来、社会と個人であった。<sup>1)</sup>

機能は以上のようなレベルにおいて使われているが、それぞれのレベル (特に第二と第三のレベル) における機能の観点から首尾一貫して体系的に社会現象を分析していく立場が機能主義であるといえるであろう。したがって機能主義といっても決して一義的であるわけではない。しかしながら、それらのいずれの立場もつまるところ「機能」概念に立脚しているところから共通点を認めることもできる。

認識論的にいえば、機能とは「実体 (substance)」に対立する概念であり、したがって機能主義は、実体・本質、物自体 (thing in itself) は認識不可能であり、存在はただそのはたらき、作用、すなわち現象や属性においてのみ認識されうるとする不可知論の立場に立つ。

しかしながら、機能として顕現する社会現象の本質・実体は認識不可能なものであろうか。理論物理学者武谷は、社会科学へのアナロジーも可能であるといわれる氏の自然認識論、いわゆる「武谷三段階論」において、認識には現象論的認識、実体論的認識、本質論的認識 (本質論のなかにはつねに新しい現象論的要素が芽生え、次の発展を準備している) があり、一般的には認識はこの順をおうに従って深まり、確かなものとなり抽象度が増す、と述べている。<sup>2)</sup>

ある対象ないし存在の機能は、対象、存在の本質によって規定されて現象するはたらきにほかならないのである。このような意味において、機能主義でいわれる機能も、それが本質と無関係ではないこと、本質に規定されて現象していること、また武谷三段階論でいわれる現象論的認識の段階に相当するものであり、従って社会・文化現象の本質を究明するための第一段階であるという留保をつけて使用されるべきである。

(2) みずからを機能主義の最初の提唱者であると呼号しているにもかかわらず、Malinowski において機能概念は決して一義的であるとはいえない。「集団が社会全体のうちで占める位置を算出する必要、つまりその機能を定義する必要」<sup>3)</sup>、「機能、すなわち活動の統合的效果」<sup>4)</sup>、「機能は、人々が協同し、製作物を使用し、財を消費する活動による要求の充足というより以外には定義されえない」<sup>5)</sup>、「機能とは、文化の体系全体の中で、制度の果している役割のことである」<sup>6)</sup>

機能的文化観に対する彼の信念は学的生涯を通して少しもゆるぎをみせなかったといわれるが、みられるようにその強調点のおき方にはズレがみられる。しかしながら、「有益または効用、および関係という概念を通して機能概念にアプローチしなければならない」<sup>7)</sup>と述べているように、本書においては、前述の機能概念の第三のレベル、その中でも個人の欲求充足に対する文化の貢献を機能ととらえて、彼の文化論を展開していることは、後述のⅢ—1) 文化の定義のところでも述べよ

う。このように、文化人類学は、文化の歴史を、文化の地理を、文化の空間を、文化の時間を探る。

次に、Malinowski の機能主義は、文化人類学における書かれざる歴史の復元の方法論、進化主義 (evolutionalism) , 伝搬主義 (diffusionism) の古典学派に対する明確な批判意識の上にたったものである。

「いうまでもなく、「遠くへだたった地域相互間における文化の形態の一致類似という現象をば、多く人類普遍の内的発展法則にもとづく発展段階の同一性に帰し、したがってこれを各個独立の発生として説明する」<sup>8)</sup> のが進化主義に共通した考え方である。Morgan L.H. の有名な「古代社会」もこの方法論的立場によるもので、彼は人間性の斉一性の原理によって、人類はひとしく野蛮・未開・文明の三段階を経て進化するという社会進化論をうちたてた。

他方、伝搬主義は、文化の伝搬や借用、移動を重要視し、人間生活の主要な文化要素の空間的な類別的分布図—文化圏—を基礎とする。そして、同時に観察されうるこのような異質の文化圏は実は、「近代的文明以前の時代における文化の固執性・停滞性・保守性といったような一面の事実、ならびにこの事実の表現としての地球上における文化発展の不均等性・跛行性」<sup>9)</sup> に由来するものであるから、文化圏を時間的な層位の関係—文化層—に還元して歴史を再構成しようとする考えである。

Malinowski はこのような進化主義、伝搬主義の考え方に対して、「両派の信奉家たちも……異なった角度から文化の成長の問題にアプローチし、文化の解明に独自の貢献をしてきた」<sup>10)</sup> と評価している。しかしながらこの評価もそれぞれが自身の主張の適応範囲を正しく認識している限度においてである。例えば進化主義で「起源 (origin) 」と並んで重要な概念である「段階 (stage) 」にもとづく継起的発展段階図式についても、それを「きわめて一般的なものとするか、さもなくば一定の地域と一定の条件のもとにおいてのみ妥当させなければならない」<sup>11)</sup> また伝搬主義においてもその基盤は地図に記入された文化事象を比較することにあるのに、その比較法が誤っていたため、もともと容認できる考え方である伝搬主義の健全な発展が疎外された。

しかしながら、一定の留保をつけた上で評価され、Malinowski によって「一方にかたよらず、折衷でさえある見解をとる」<sup>12)</sup> 必要を説かせる両古典学派にも容認できない考え方が含まれている。それは、進化主義にあっては、「死重 (dead-weight) 」, 「残存 (survival) 」, 伝搬主義にあっては「借用した文化特性 (borrowed trait) 」, 「文化特性複合」 (trait complex) などの概念に示される考え方である。

残存とは、その文化環境に適合することなく存続だけしている、無機能的な文化特色、または周囲の文化と調和しない機能を発揮している文化特色とされる。しかしながら、「残存が存続しうるのは、それが新しい意味、新しい機能を獲得したためであることは疑いない」<sup>13)</sup> 例えば、ニューヨークの通りにおける馬車の存在は、確かに交通機関の進んだ時代では効率的な交通機関としてみると時代遅れであるが、しかしながら「懐旧の情をやるため」という別の機能は果しうるものであり、しかもその機能は現在の諸条件と十分に調和しているのである。そしてこの残存の概念は、進化段

階を再構成するまやかしの方法として使われ、現地調査における観察を速成的に仕上げる簡便な方法となっている点で、害悪を及ぼしている。他方、文化特性、文化特性複合は、「文化を生命のない無機物とみる見解に害されており、文化を何世紀もの間冷蔵庫の中に保存しておけるもの、大洋大陸を超えて運搬できるもの、機械的に分解したり組立てたりできるものとして取り扱う」<sup>14)</sup>このような考え方は、関連した一組の現象を、単なる勝手な想定にもとずいて独立させたり、実際に作用している文化諸要因によって決定された関係を探究するのではなく、本質的でなく重要でない構成に最大の関心を与えるという害悪をもたらす。

以上のように、両古典学派は「取り扱う文化的現実の完全で明確な分析に十分な注意を払ったかどうか」<sup>15)</sup>の点で、また「文化的事実の中で作用している関連した要因を明確に定義し、関連づけるという点での科学的活動にこれまで十分な注意が払われなかった」<sup>16)</sup>という点で、欠点をもつものであった。このような批判意識のうえにたって Malinowski は、「現地調査者に何を観察し、いかに記録すべきかに関する明確な見通しと十分な教示を与えることに主要な意味を与える」<sup>17)</sup>機能理論の立場、「機能主義が、文化の予備的分析として基礎的な妥当性をもち、人類学者に対し、文化確認の唯一の正当な規準を提供する」<sup>18)</sup>という明確な主張に至るのである。

## 注

- 1) 作田啓一：文化の機能 講座社会学第三巻 社会と文化 東大出版会所収 pp. 34~35. 1958
- 2) 武谷三男：弁証法の諸問題 武谷三男著作集1 頸草書房 pp. 3~8, p. 33. 1968  
武谷：科学と技術 武谷三男著作集4 頸草書房 p. 253. 1969  
武谷：自然科学と社会科学 武谷三男著作集5 頸草書房 pp. 77~133. 1970  
坂田昌一：科学に新しい風を 新日本出版社 p. 181. 1966
- 3) B.Malinowski : A Scientific Theory of Culture and Other Essays, p. 45.
- 4) B.Malinowski : *ibid.*, p. 48.
- 5) B.Malinowski : *ibid.*, p. 39.
- 6) B.Malinowski : *ibid.*, p. 48.
- 7) B.Malinowski : *ibid.*, p. 155.
- 8) 石田英一郎：文化人類学ノート, 新泉社, p. 85, 昭和42.
- 9) 石田：同上, p. 76.
- 10) B.Malinowski : A Scientific Theory of Culture and Other Essays, p. 17.
- 11) B.Malinowski : *ibid.*, p. 16.
- 12) B.Malinowski : *ibid.*, p. 24.
- 13) B.Malinowski : *ibid.*, p. 29.
- 14) B.Malinowski : *ibid.*, p. 32.
- 15) B.Malinowski : *ibid.*, p. 26.
- 16) B.Malinowski : *ibid.*, p. 21.
- 17) B.Malinowski : *ibid.*, p. 175.
- 18) B.Malinowski : *ibid.*, p. 176.

